

日清戦争下における公州牛禁峙の戦い

(…李氏朝鮮政府軍と東学農民軍の戦い…)
「福岡市総合図書館 2022 年度利用者研究成果」

軍事史研究家 日名子 健二

1. はじめに

2021 年 12 月 5 日、韓国大統領選挙の過程で李在明氏は、全羅北道井邑市のセムゴウル市場を訪れ、次のように演説した。「…東学革命軍は槍を手に、より良い生活のために命を捧げた。しかし残念なことに、牛禁峙(ウグムチ)^①峠で 3 万人に近い革命軍がたった 2,700 人の日本軍により全滅した。武器が不足していたらからだ…」(<https://www.wowkorea.jp/news/Korea/2021/1205/10325829.html>)と。

革命軍か乱民軍^②かの評価は、韓国(民)がすべきことなので、筆者はこれについては、言及するつもりはない。しかし、どこから日本軍 2,700 人と出てきたのか、出処不明?。そこで、改めて韓国にとっても、矛盾する悩ましい問題の一つである「牛禁峙の戦い」の実像を、この機会に調査研究してみることにした。

- ① 緯度経度 36.43178,127.111988(以後、位置を示す緯度経度の文字は略し、数値のみとする)に位置。牛金峙とも記すが、本論文では牛禁峙で統一する。戦いの模様については、「戦闘詳報(12/4)」を末尾に附録として示す。
- ② 李承晩政権の時代までは乱民軍の評価であった。しかし近年、革命軍と評価が変わりつつある。なお本論文では東学農民軍と表記する。

2. 牛禁峙の戦に至る経緯

忠清南道論山付近に集結し、南から公州に進撃しようとした東学農民軍^③(全奉準指揮)を、公州牛禁峙で迎え撃ったのは、李氏朝鮮政府軍(韓兵)と日本軍の連合軍である。そこで、この戦闘に参加した日本の後備歩兵第 19 大隊^④第 2 中隊を中心に戦いに至る経過を次に示す。

- ③ 1894 年 4 月下旬、白山結陣(大会)時に倡儀文とともに四大綱領の一つ「驅兵入京滅尽権貴(ソウルに進撃し、権貴を滅ぼせ)」を定めている。権貴は、国王を取り囲む貴族権力者(閔氏一族含む)と解されるが、国王高宗自身や大院君へ如何に対応するかの言及はなく、君主制も否定はしていないようである。

- ④ 「南部兵站監部日誌 11, 12 月」による. 後備歩兵第 19 大隊の編成表によれば下士兵卒の戦闘要員は約 600 名である(表 1) 大隊長の南小四郎は 1842 年山口県生, 9/5 招集を受け大隊長職を拝命する.

明治 27(1894)年, 太陽暦. (○/○)は朝鮮暦, 即ち太陰暦の月日を示す.

- 8/7 大邱にて暴動電信線破砕, 10 日洛東幽谷間で切断される[陣中日誌]
9/24 安東で徐相轍の蜂起 9/25 龍宮付近にて竹内騎兵大尉殺害される。
9/30 東学党の鎮定について, 大院君力を尽くすので「日本兵ノ派出ハ見合ハセヲ乞エリ」[大鳥公使より林外務次官宛電報]
10/5 仁川に南部兵站監部(大本営直轄)を創設 (9/7)
10/12 頃 参礼会議(東学農民軍幹部による) (9/14)
10/18 壮衛營兵(李斗黄), 經理庁兵(成夏泳), 匪徒[東学農民]剿捕のため出動 (9/20)[両湖右先鋒日記]
10/19 東学農民の一斉蜂起に備え, 李氏朝鮮政府は両湖巡撫營^⑤を発足(9/21)
10/24 朝鮮国王「高宗」, 東学農民を匪徒と断ず(9/26)
10/27 井上馨駐韓公使, 京城着任(10/25 仁川着). 朝鮮へ 5 個中隊の派遣要請.
10/30 後備歩兵第 18 大隊(京城守備隊 3 個中隊)日本発.

11/4 同第 18 大隊 京城着(10/7)
11/7 後備歩兵第 19 大隊(3 個中隊)仁川上陸
11/8 金弘集総理大臣, 金允植外部大臣, 井上公使に東学農民軍の鎮圧を依頼^⑥. (10/11)
11/8 統衛營兵, 酉時, 崇礼門から進発, 渡江し果川泊(10/11) [巡撫先鋒陣騰録]
11/9 壮衛營兵(李斗黄), 陰城, 槐山經由清州着 (10/12)
11/9 伊藤南部兵站司令官, 派遣隊長へ訓令「東学党鎮圧ノ為メ派遣隊長ニ与フル訓令」及び「三道分進中隊宿泊日割予定表」を示す.
11/12 第 19 大隊 7 時 30 分龍山から南下. (10/15)
11/13 壮衛營兵(李斗黄), 報恩方面へ進出 (10/16)
11/13 論山集結の全奉準から忠清監司朴齊純あて書簡 (10/16)
11/15 壮衛營兵(李斗黄), 燕岐鳳巖里へ移動 (10/18) [右先鋒日記]
11/16 經理庁兵(成夏泳), 公州入城(10/19) [右先鋒日記], [先鋒陣騰録]
11/17 第 19 大隊第 2 中隊(森尾雅一^⑦大尉 西路隊)天安着. 全州街道
11/15 振威にて赤松支隊を編成し, 牙山へ派遣.
第 3 中隊及び大隊本部(石黒光正大尉 中路隊)清州街道.
11/16 竹山 11/21 清州着 11/22 報恩, 燕岐を偵察

11/23 清州発

11/25 公州より「応援求ム」を受電.

第1中隊(松木正保大尉 東路隊) 11/18 忠州

11/18-19 木川細城山[®]において戦闘(壮衛營兵 李斗黄ら), 東学農民軍敗北.
(10/21頃) その後の大橋 11/20-21, 洪州城 11/22-24 戦闘でも李
氏朝鮮政府軍に敗北.

11/20-22(10/23 から 25) 公州第一次戦闘 [公山剿匪記]

11/20 公州駐屯中の鈴木彰少尉(後備歩兵第6聯隊)も利仁[®]にて戦闘に参加
經理庁兵(洪運燮, 具相祖), 錦江渡河, 大橋へ(10/23) [右先鋒日記],
[先鋒陣騰録]

經理庁兵の成夏泳, 具完喜は利仁にて戦闘

11/21 森尾大尉, 徳坪[®]発公州着(行程 30km). 孝浦, 陵峙をめぐり即戦闘開始[®],
戦闘要員約 100 名(赤松少尉の支隊は洪州方面で戦闘中のため除く).

統衛營兵(李圭泰)も酉時, 錦江を渡河し公州着. (10/24) [先鋒陣騰録]

11/22 孝浦, 陵峙を死守. 農民軍敗北, 敬天, 定山方面に退却.

11/24 壮衛營兵(李斗黄), 細城山戦闘後公州着 (10/27).

11/25 農民軍, 洪州城包圍(10/28)

11/25 公州森尾大尉, 大隊本部に救援要請(電報).

11/26 壮衛營兵(李斗黄), 公州発洪州へ救援に向かう (10/29)

11/27 第3中隊(大隊本部), 公州到着予定も, 農民軍に阻まれ結局未着.

11/30 公州森尾大尉, 龍山兵站司令部に弾薬を請求(電報).

12/3 仁川より応援の山村大尉(第3師団後備歩兵第6聯隊), 牙山経由で洪州
着. 以後山村は 12/14 まで駐留. 最後は斎藤少尉の1個小隊が 12/25 に仁
川に引き揚げ.

12/4 洪州の赤松少尉, 公州に向け出発. 12/7 公州着.

12/4-7(11/8 から 11) 公州第二次戦闘 [公山剿匪記]

12/4 利仁の政府軍(成夏泳)敗北, 牛禁峙に一旦撤退.

12/4-5 森尾大尉, 牛禁峙にて戦闘[®], 東学農民軍は石城方面に退却.

12/5 壮衛營兵(李斗黄), 洪城入城(11/9). 翌日洪城から維鳩經由, 公州定山へ.

12/6 金開南軍, 鎮岑県占領 (11/10)

12/9 金開南軍, 清州戦闘で清州兵營軍と日本軍に敗北 (11/13)

12/10 壮衛營兵(李斗黄), 龍水幕着. 森尾大尉に再会 (11/14)

12/11 魯城で第3中隊・大隊本部は第2中隊(森尾)と合流. 更なる南進命令(全州,
茂朱, 知禮の線まで)を受領, 東路隊は居昌へ. …即ち当初方針を変更.

12/20 全州奪還(11/24)

1/5 第3中隊, 羅州入城. 大隊(東学党討滅)本部を羅州に開設(12/10)

1/22 朝鮮政府軍珍島へ, 第1中隊(松木)も同行. 巡撫營廃止(12/27)

2/4 第1中隊, 赤松支隊など羅州に入城(1/10)

2/5 壯衛營兵, 光陽, 順天などを転戦後, 羅州に入城. 第3中隊も (1/11)

2/10 第1、第3中隊、羅州発

2/11 大隊本部、第2中隊、羅州発, 帰途に就く (1/17)

⑤ 指揮官巡撫使 副将申正熙. 統衛營, 壯衛營, 經理庁などの兵士よりなる.

⑥ この時, 韓兵に対する指揮権を日本軍に移譲か. 11/9 付の伊藤南部兵站司令官から, 派遣隊長への訓令では「…這般東學黨鎮壓ノ爲メ前後派遣セラレタル韓兵各隊ノ進退調度, 總テ我士官ノ指揮命令ニ服從シ, 我軍法ヲ守リ若シ之ニ違背シタルモノハ, 軍律ニ從テ處分セラルベキ旨, 朝鮮政府ヨリ韓兵各隊長ヘ達シ濟ニ付, 韓兵ノ進退ハ總テ我士官ヨリ指揮命令ヲス可シ」とある.

指揮権は戦時作戦統制権とも称し, 韓国では朝鮮戦争の初期に, 当時の李承晩大統領が韓国軍に対する指揮命令権を, 書簡で国連軍司令官に委譲している. その書簡の内容は, 韓国国民と政府は「現在の敵対行為が続く間」韓国軍が「貴下の全体的指揮を受けることになったことを“光栄”と考える」というものである. このハシリが東学農民軍の討伐時にも見られた, ということである. 当時(日清戦争、朝鮮戦争)の韓国の指導層や権力者は国の存亡が掛かっていたので, 委譲には抵抗感がなかったのかもしれない. しかし現在は, 韓国内の保守系(例えば朴槿惠政権)、進歩系(例えば文在寅政権)とも委譲については, 問題視している.

⑦ 1846 年生. 高知県土族. 明治 15 年歩兵大尉に任官. 他の中隊長も元高知県土族である.

⑧ 公州の前哨戦, 朝鮮政府軍(壯衛營兵)が東学農民軍を駆逐.
セソ山(198m) 36.756183,127.253860

⑨ 36.362618,127.061810 李氏朝鮮時代の駅

⑩ 大東輿地図(1861)に表記あり, 全義への分岐点. 36.689295,127.156423
「駐韓日本公使館記録」(分進中隊行動予定表)では大坪に駐泊予定. しかし, 「東学黨征討策戦實施報告(宿泊表)」(表 2)により徳坪に泊したことが判る.

⑪ 「……在公州森尾大尉ノ筆記報告ニ依レハ, 西路分進中隊ハ十一月廿一日公州ニ達シ, 其東南ニ在リシ數万ノ賊徒ト交戦シ, 之レヲ撃退ス. 翌

二十二日未明ヨリ、彼レ再ヒ攻撃シ来ル。我兵之レヲ拒キ、午後一時頃遂ニ之レヲ擊攘シ……同日没ニ至リ賊徒ハ敬天、定山ノ方位ニ退却セリ……」(12月3日午後2時5分仁川発、伊藤兵站司令官の電報)。

⑫ 附録の戦闘詳報 12/4 を参照のこと。

以上のように第19大隊の3個中隊は、三路に別かれて南下。西路(即ち全州街道)を天安から公州に進んだのは第2中隊(森尾大尉)の1個中隊(但し1個小隊2個分隊を欠く)である。

3. 後備歩兵第19大隊第2中隊の実力

明治27(1894)年11月の時点では、現役兵や予備役兵は遼東半島で清国軍に對峙し戦闘中。後備第19大隊は元々下関彦島守備が本務であったが、戦況の進展で東学農民軍に對応するため、急遽朝鮮に派遣されることになった。大隊長の南小四郎(1842年生の52歳)は後備役少佐、第2中隊長の森尾雅一大尉とも正規な士官学校教育を受けていない、このため韓兵まで指導指揮できるような高等戦術教育を熟知していたかは疑問。しかし、戊辰戦争や西南の役などの実戦を通じて活躍した指揮官で、勘所は心得がある。

兵卒は常備役7年を経た27歳から32歳の高年齢で、多くが妻帯者で家族持ちであるため、士氣(精神面)や戦闘能力(体力面)は、現役兵より劣ると考えるのが自然である。

1個中隊(3個小隊編成)の戦闘要員は、下士官17名、兵卒190名の計207名、このうち赤松支隊の1個小隊(4個分隊編成)と2個分隊を欠くので、公州牛禁峙で戦闘に参加できた兵は約100名である。冒頭の日本軍2,700人という李在明氏の発言は明らかに間違いであることが判る。さらに、韓兵に比し日本軍の士氣、作戦能力、武器が優れていたから、と持ち上げる話があるが、これは現役兵に対する比較評価であり、後備役兵まで含んだものと、単純にとらえるのは危険で注意を要する。なお、歩兵部隊なので武装は小銃(スナイドル銃)のみ、大砲は随伴していない。

東学農民軍鎮圧の主力は、李氏朝鮮政府軍(韓兵)で、日本軍はあくまで支援、補完の兵(但し、韓兵の指揮を任されていた)に過ぎない。なお、李氏朝鮮政府は、農民説諭のために鎮撫使を日本軍に同行させるとともに、通弁(通訳)と政府役人(内務官吏)を嚮導させ、糧食調達等の便宜を図っていた。

東学農民軍は、その士氣と数については、日本軍や韓兵を圧倒していたが、集団作戦行動(戦術)や装備において劣っていた。韓兵もスナイドル銃所持、東学農民軍の武器は火縄銃や刀槍、弓矢などで、韓兵に對し「武器が不足」は明らかである。

4. 公州戦における李氏朝鮮政府軍(韓兵)の実力

甲申事変(1884年)後、日本と清国の駐留部隊が撤退、即ち朝鮮半島から外国の軍隊がいなくなった。両国からの干渉が無くなったこの機会に、朝鮮政府も自立のため軍備を増強、即ち統衛營、壯衛營を新設したようである。これらの營兵は米国の教官により洋式訓練を受けた。

1894年11月、東学農民の蜂起に備え両湖巡撫營(巡撫使 副将申正熙)が発足。巡撫營は、統衛營、壯衛營、經理庁、教導中隊などの兵を指揮した。

公州牛禁峙での戦いには、統衛營(指揮官 正領官李圭泰/両湖巡撫先鋒将)の250名、經理庁營(指揮官 經理庁領官成夏永、同副領官洪運燮、隊官具相祖)の560名、即ち計810名が日本軍と連合し、東学農民軍に立ち向かった。歩兵なのでスナイドル銃で武装。また、火砲も随伴し、回旋銃^⑬という連発式の機関砲も装備していた。しかし、巡撫使 副将申正熙は後方にいたため、朝鮮軍の2營(統衛營、經理庁)を統括する部門がなく、各營指揮官の考え方もバラバラであり、2營の統率・運用を任された日本側(森尾大尉)も相当苦慮したと思われる。しかし經理庁の指揮官らは、日本軍に好意的で積極的に意思疎通を図り問題はなかったようである。

なお、牛禁峙戦闘時には、公州西方(海美、洪州など)に壯衛營(指揮官李斗黄/壯衛營領官)、東方(連山、沃川など)には教導中隊(指揮官李軫鎬/中隊長 第3中隊と共働)の兵が偶々位置し、東学農民軍の動きを牽制することになった。

⑬ 米国製のガトリング機関砲で、公州を守る李氏朝鮮政府軍にも配備か。

東学農民軍は、この回旋砲に悩まされ多数の死傷者を出した。

「公州牛禁峙の戦い」(附録戦闘詳報による)のまとめ

- (1) 日本軍は100名、李氏朝鮮政府軍(韓兵)は810名で計900名強。
- (2) 李氏朝鮮政府軍(韓兵)の武装も、東学農民軍に比し卓越していた。
- (3) 日本軍に死者、負傷者なし。敵陣に突入する行動はあったが、負傷者(刀創)がないため銃剣装着の白兵戦は無かったと推測。李氏朝鮮政府軍(韓兵)の死者、負傷者は不明。
- (4) 東学農民軍の遺棄戦死体は37名。これから全体の戦死者数は約100名、負傷者は300名程度ではないかと推定できる。したがって、数万と云われる農民軍が一気に全滅(死)したのではないことが判る。

5. 朝鮮農民(良民)の日本軍に対する見方

当時の一般朝鮮農民が、一戦闘(牛禁峙戦など)ではなく、忠清、全羅道の東学農

民鎮圧作戦の過程で日本軍をどう見ていたのであろうか。韓兵の場合、移動にあたり村々から略奪を行った。これに比し日本軍の場合、糧食を徴収する場合は、韓銭で正当に対価を支払った(村民が逃散していない場合は除いて)。国際世論を意識していたためである。従って、朝鮮農民は日本軍に対して、大きな恐怖感はなかった、と思われる。以下に2例を示す。勿論、東学農民に協力する県官(地方役人)に対して、拷問などの強力な姿勢がとられた事は間違いない(しかし、李氏朝鮮政府軍と合同作戦の上で)

(1) 忠清道, 泰安・海美地方における住民の歓迎

山村忠正大尉(第3師団後備歩兵第6聯隊)の中隊は、仁川・京城近傍の兵站路の守衛が本来の任務であった。しかし、時々東学農民軍鎮圧のため洪州付近に応援として派遣された。11月下旬には、第19大隊第2中隊赤松支隊の応援として、派遣され洪州城に入る。12月14日頃には泰安・海美方面に出張(李氏朝鮮政府の義勇兵と協力して)、下記電報に記すような歓迎を官民から受けた。

山村中隊長の報告(電報)

「仁川ヨリ応援トシテ派遣ノ中隊洪州ニ在リ。…中隊ハ洪州ヲ發シ海美、瑞山ヲ經テ泰安ニ至リ、該地方ノ義勇兵ヲ使用シ賊ヲ半島ニ押込メ数百名捉ヘ…○故ニ将来此方面ノ賊ハ再ヒ興ルノ憂ヒナカルヘシ○泰安ヨリ海美ニ至ル地方ハ官民共ニ我軍隊ヲ勞ヒ、天幕ヲ張り或ハ酒肴ヲ供ヘ、庶民ハ自ラ荷物ノ運搬ニ従事シ、是ヲ名譽トスルモノト如シ…」
十四日[12月14日]徳山發山村中隊長報告」

(2) 全羅道左水營(麗水)からの救援要請

1894年12月中旬は、第19大隊の第2、第3中隊がやっと全羅道北部に入った段階。また、同時期に釜山守備隊から1個中隊(第5師団後備歩兵第10聯隊、鈴木安民大尉)が河東まで進出し、東学農民軍と蟾居、光陽で交戦。即ち、12月中旬の段階では、順天府に日本陸軍は達していなかった。

- 12/17 全羅道東南部でも、東学農民の活動が盛んで、順天府使が殺される。さらに左水營にも東徒が来襲し、四百余名の城兵と接戦となる。この時、城兵の一部に日本服を着用させ、日本兵と偽装工作。これにより農民軍は城の囲みを一旦解く。
- 12/18 水軍節度使金澈圭は、吹打島^④の日本漁民17名を保護するとともに、左水營に收容し協力を求める。
- 12/19 統營港碇泊の筑波^⑤(艦長黒岡帯刀大佐)に使を派遣して、照会書^⑥

[李氏朝鮮政府の旧暦]により危急を訴え、支援(援兵)を求める。

12/20 筑波艦, 左水營に着船し, 陸戦隊を編制。

12/21 陸戦隊上陸. 12/22 艦長上陸, 陸戦隊を検閲, 午前6時30分左水營城外へ進発。

12/23 午前4時陸戦隊, 左水營に帰着. 12/24 筑波, 左水營に滞泊

⑭ 現禾太島, 大分県の潜水漁夫が漁業を営み, 水産製造所(缶詰工場?)を設置. 朝鮮人李周會の便宜によるものか。

⑮ 1947t, 乗組下士官40名, 兵卒239名

⑯ 「大朝鮮國二品御全羅左道水軍節度使金澈圭, 爲照會事, 匪類猖數千餘名, 住圍城外, 不可抵敵, 精兵劃給剋日殄滅, 次提報三道統制使矣, 仰煩貴艦, 另念力弱, 筑波軍艦方泊於本營前洋, 幸望救護殄滅東學, 爲此照會, 須至照會者

右照會 大日本帝國 軍艦筑波號 艦長 海軍大佐

開國五百三年十一月二十五日」

この救援要請に対し、「…全羅左水營は「力が弱い」といって、日本軍艦に助けを求めたという、あきれ返る歴史だった…」[金恩正ら(2007)]と述べている。邦訳表現なので正確には判らないが、単純にあきれ返る歴史と総括するのは問題であろう。

6. 「長興の殉節碑」と「牛禁峙の慰霊塔」

全羅道長興は道内で羅州, 左水營(麗水)と並び東学農民の支配を受けなかった都市である。長興には、この農民戦争で長興碧沙駅^⑰を守っていた政府軍兵士が殺され犠牲になったので、その名を刻した「光緒二十年甲午東乱守城卒殉節碑」がある。一方、長興近郊には、農民軍を称える「東学農民革命記念塔」もある。碧沙駅の犠牲者の子孫達の反対で、この革命記念塔の記念式典はできなかつたようだ。即ち、長興では、現在でも碧沙駅で殺戮された政府軍兵士・役人と東学農民軍との子孫とわだかまりがある^⑱。

⑰ 36.362785,127.062536 李氏朝鮮時代の駅

⑱ 古邑(古阜)の農民蜂起に対して、調査と收拾を目的に安覈使として派遣されたのが長興府使李容泰である。容泰は長興の民兵率いて古邑に入り、收拾の過程で農民を弾圧した。

また、牛禁峙には「無名東学農民軍慰霊塔」があり、朴準成氏は同塔の建設を記念した碑文「九月の蜂起は、日本軍の宮城(注:王宮のこと)侵入で国の運命が危うくな

ったとき、日本軍を破るための民族的な大事件であった。そして民族の自衛のための民衆の抗争であった。甲午先烈たちは彼らの義の意思を遂げられず、恨(ハン)を抱いたまま、匪徒の汚名を被って津々浦々の戦場で日本軍の銃弾に惨めに倒れていった」について、朴氏は次のように批判している。「碑文の内容は、反侵略の性格と日本軍による犠牲だけを強調している。九月蜂起以後の第二次農民戦争も反封建的な性格もあり、農民軍を弾圧して虐殺する勢力には、日本軍だけでなく政府軍と各地の保守民保軍も含まれている。(この碑文の説明は)朝鮮社会の内部の葛藤と対立を避けている」[中塚明(2013)]と。

7. おわりに

拙稿から、牛禁峙戦闘は実質的に同じ国民同士の身内の戦いであったことが判る。牛禁峙の地を死守し斃れた李氏朝鮮政府軍の兵卒や官吏の名誉はどうするのか。李在明氏の発言では英霊はうかばれまい。国を守った英霊、我が国なら靖国神社に祀られるのに、韓国では東学農民軍を革命軍と称賛する時代となった。英霊は涙しているだろう。

最後に、筆者も朴準成氏の見解に同意する。農民革命軍か乱民軍か？ 大韓民国の歴史研究者や有識者の方々は、恐れず総括すべきであろう。朴氏ですら疑問を呈している、朝鮮社会の内部の葛藤と対立を避けずに乗り越えて欲しい。「日本は歴史直視を」は、韓国文在寅氏に言われるまでもない、当然の事だ。しかし、「韓国も歴史事実」を直視して欲しい。そうすれば「大韓民国」は、世界から益々信用、信頼される国家になると思う。

附録

<公州附近 戦闘詳報>

自明治二十七年十二月四日至同五日

大尉 森尾雅一

- 一. 十二月四日午後四時板峙[36.37536,127.146]ノ警戒ニ任シタル經理營兵ヨリ、午後三時優勢ナル敵ノ攻撃ニ遇ヒ、漸次公州ニ退却セリトノ報告ヲ受ク。
- 二. 當時公州ニ在ル官軍左ノ如シ。
第貳中隊 (一小隊ト二分隊缺) [つまり半個中隊、戦闘要員は約 100 名]
韓兵 八百拾名
- 三. 右ノ報告ニ依リ韓兵 (統衛營兵) 二百五拾名ヲ、月城山 [36.44092,127.14162 標高 313m]ニ至リ要地ヲ占領シ敵ヲ防止セシメ、同ク(經理營兵) 二百八拾名ヲ、香峰附近ニ於テ月城山ト連絡シ敵ヲ防止セシム。利仁ニ在ル經理營兵二百八拾名ハ、漸次牛禁峙山ニ退却セシム。

第貳中隊ハ牛禁峙山[36.43197,127.1125]ヲ占領ス.

午後五時二十分, 鈴木特務曹長[鈴木政吉]ヲシテ, 其小隊及利仁ヨリ退却セル韓兵ヲ以テ牛禁峙山犬蹲山及利仁街道ヲ守備セシム.

大尉森尾雅一ハ第三小隊(二分隊缺)ヲ以テ香峰附近ニアリ.

四. 香峰ニ至リ賊情ヲ偵察スルニ, 敵ハ香峰山上ヨリ約千四百米突ヲ去ル一帯ノ山上ニ賊徒群集セリ(約二萬餘), 熾ニ燃火シ東南面ヲ包圍シ, 頻リニ銃砲ヲ發シ其勢甚タ盛ナリ, 然レモ又前進スルノ状ナシ. 故ニ相對時シテ翌日朝ニ至ル.

五. 五日午前十時, 利仁街道牛禁峙山ヲ亘ル約一里ノ處ニ賊徒大約一萬餘現出シ, 我右翼西方ニ向ヒ急進シ來ル其勢猛烈ナリ.

牛禁峙山ハ公州ノ要地ニシテ之ヲ失ヘハ又公州ヲ守備スルノ術ナシ. 之レト同時ニ三花山ノ賊(凡一萬餘)梧實後山ヘ向ヒ前進シ勢甚タ急ニシテ, 且ツ此地モ亦公州ノ要地ニシテ天然ノ險アリ, 故ニ野中軍曹[一等軍曹 野中彌參郎]ヲシテ一分隊及韓兵一分隊ヲ以テ堅ク梧實後山ヲ防止ス可キ事ヲ命セリ. 午前十時四拾分牛禁峙山ニ至リ敵情ヲ偵察スルニ, 敵ハ牛禁峙山ノ前方約五百米突ノ山上ニ前進セリ. 此時鈴木特務曹長ハ左ノ配備ヲ爲シ在リ.

(一)一分隊ヲ犬蹲山ノ山腹又他ノ一分隊ヲ牛禁峙山ノ山腹共ニ利仁街道ノ右方(前方道路ヲ防止シ得ル地)

(二)韓兵(經理營兵)二百八拾名ヲ鳳凰山(前面及右側ノ防守ニ任ス)

(三)殘餘ノ二分隊ハ牛禁峙山

茲ニ於テ第三小隊ハ牛禁峙山ニ増加シ, 一齊射撃ヲ以テ前方ノ山上約八百米突ノ處ニ群集セル敵ヲ當ラシメ, 經理營兵ヲ以テ最近ノ敵ニ向ヒ射撃ヲ行ハシム. 然レモ賊ハ巧ミニ地物ヲ利用シ凡二百名餘ハ牛禁峙山頂ヲ距ル約百五拾米突ノ山腹ニ進ミ來リ, 其先頭五六名ハ數米突ノ死角ニ迫リ前面山上ノ敵ハ益々前進シ, 激戰數時我兵力戰最モ勉ム.

六. 午後一時四十分, 經理營兵ノ一部(五十名)ヲ牛禁峙山ノ前方山腹ニ進メ, 以テ牛禁峙山頂ヲ距ル約百四五十米突ノ山腹ニアル敵ノ左側ヲ射撃セシム. 故ニ敵ハ前方約五百米突ノ山頂ニ退却セリ.

午後一時二十分, 牛禁峙山ノ我兵ヲ其前方山腹ニ進メ, 經理營兵ニ急射撃ヲナサシメ敵ノ動搖スルヲ見テ, 一小隊ト一分隊ヲ以テ敵陣ニ突入セリ. 茲ニ於テ敵ハ退却セリ, 依テ經理營兵ヲ追撃ニ任シ, 中隊ハ利仁街道ニ出テ敵ノ退路ヲ迫ラントセリ.

七. 中隊ハ利仁街道ニ出テ急ニ追撃シテ遂ニ利仁附近ニ至リ, 一帯ノ山腹ニ火ヲ放チ私カニ退却セリ. 然レトモ東南方ノ賊徒ハ依然退却セス依テ韓兵ヲ以テ, 牛禁峙山梧實後山香峰月城山等ノ警戒ニ任シ, 其他ヲ公州ニ引揚ク時ニ午後

八時ナリ.

彼我死傷者

我兵 無シ

賊徒 死者三十七名 傷者 未詳

分捕品

火繩銃 五挺, 鎗 五拾本, 鉛丸 約貳貫目, 刀 貳本, 弓 壹張, 矢 五拾本,
旗六拾本 右焼失ス

火砲 貳門, 牛 貳頭, 馬 貳頭

費消彈藥 貳千發

[]は筆者の注

参考文献

- ・金恩正・文炅敏・金元容 監修朴孟洙, 2007, 東学農民革命 100 年, 323-328
- ・中塚明・井上勝生. 朴孟洙, 2013, 東学農民戦争と日本—もう一つの日清戦争,
31-190
- ・柳永益, 2000, 日清戦争期の韓国改革運動—甲午更張研究. 東学農民軍, 28-31
- ・姜在彦, 1970, 朝鮮近代史研究, 188-200
- ・朴宗根, 1982, 日清戦争と朝鮮, 188-196
- ・趙景達, 1998, 異端の民衆反乱—東学と甲午農民戦争
- ・井上勝生, 2013, 明治日本の植民地支配
- ・井上勝生, 2018, 東学農民戦争, 抗日蜂起と殲滅作戦の史実を探究して --韓国中
央山岳地帯を中心に--, 人文學報 (2018), 111: 1-65

https://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp/dspace/bitstream/2433/231140/1/111_1.pdf

- ・高橋邦輔, 2018, 全羅の野火「東学農民戦争」探訪
 - ・市川正明, 1979, 《明治 100 年史叢書》日本外交史料(4)日清戦争
 - ・渡辺延志, 2021, 歴史認識日韓の溝: 分かり合えないのはなぜか
 - ・大韓民国文教部国史編纂員会, 1989, 駐韓日本公使館記録
- https://db.history.go.kr/item/level.do?sort=levelId&dir=ASC&start=1&limit=20&page=1&pre_page=1&setId=-1&totalCount=0&prevPage=0&prevLimit=&itemId=jh&types=o&synonym=off&chineseChar=on&brokerPagingInfo=&levelId=jh_001&position=-1

- ・吉田光男, 1994, 大東輿地図
- ・朝鮮総督府, 1922, 大正三年測図同八年第一回修正測図(公州), 印刷兼発行者

陸地測量部[「朝鮮半島五万分の一地図集成」に収録]

- ・黄載璣ら, 1989, 最新韓国基本地図
- ・田保橋潔, 1940, 近代日鮮関係の研究下巻
- ・轟博志, 2013, 朝鮮王朝の街道, 167-176
- ・南小四郎, 1895, 東学党征討経歴書, [井上(2018)に一部所収]
- ・後備第 19 大隊第 1 中隊第 2 小隊第 2 分隊兵士, 1901, 明治二十七年日清交戦従軍日誌, [井上(2018)に一部所収]
- ・両湖招討騰録(朝鮮漢文), [駐韓日本公使館記録 2 に所収]
- ・東学党征討略記, [駐韓日本公使館記録 6 に所収]
- ・東学黨征討策戦實施報告(宿泊表), [駐韓日本公使館記録 6 に所収]
- ・東学党鎮圧ノ為メ派遣隊長ニ与フル訓令, [駐韓日本公使館記録 1 に所収]

史料(発行者 韓国歴史編纂委員会)

- ・公山剿匪記(朝鮮漢文)

https://db.history.go.kr/item/level.do?sort=levelId&dir=ASC&start=1&limit=20&page=1&pre_page=1&setId=-1&totalCount=0&prevPage=0&prevLimit=&itemId=prd&types=&synonym=off&chinessChar=on&brokerPagingInfo=&levelId=prd_011&position=-1

- ・両湖右先鋒日記(朝鮮漢文)

https://db.history.go.kr/item/level.do?sort=levelId&dir=ASC&start=1&limit=20&page=1&pre_page=1&setId=-1&totalCount=0&prevPage=0&prevLimit=&itemId=prd&types=&synonym=off&chinessChar=on&brokerPagingInfo=&levelId=prd_102_0010_0010&position=-1

- ・巡撫先鋒陣騰録(朝鮮漢文)

https://db.history.go.kr/item/level.do?sort=levelId&dir=ASC&start=1&limit=20&page=1&pre_page=1&setId=-1&totalCount=0&prevPage=0&prevLimit=&itemId=prd&types=&synonym=off&chinessChar=on&brokerPagingInfo=&levelId=prd_101&position=-1

- ・各陣将卒冊(朝鮮漢文)

https://db.history.go.kr/item/level.do?sort=levelId&dir=ASC&start=1&limit=20&page=1&pre_page=1&setId=-1&totalCount=0&prevPage=0&prevLimit=&itemId=prd&types=&synonym=off&chinessChar=on&brokerPagingInfo=&levelId=prd_120&position=-1

国立公文書館 アジア歴史資料センター

- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C05121516300、留守第5師団より後備諸隊の編制表進達の件(防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C06062204600、表紙「明治27年11月12月 南部兵站監部日誌」(防衛省防衛研究所)」
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.C06060051100、12月 3日 仁川 伊藤兵站司令官 川上兵站總監(防衛省防衛研究所)」 11/21, 11/22 戦闘電報
- ・「JACAR(アジア歴史資料センター)Ref.A09054408000、職員録・明治二十二年七月・陸軍現役将校同相当官実役停年名簿(国立公文書館)」

表2 東學黨征討策戰實施報告(宿泊表)

宿泊表ハ地名ノ左肩ニ(支)ト記シタルハ支隊(支)1或ハ(支)2ノ數字ハ中隊ヲ示シ右肩ニ(滯)ト記シタルハ滯在セシ處ナリ又タ朱字(戰)ト記シタルハ戦闘ヲナシタル處ナリ

月日	西路 第二中隊	中路 本部竝ニ第三中隊	東路 第一中隊
11月12日	19大隊龍山(京城)出発		
14日	振威縣	龍仁縣	利川
15日	陽城縣 (支)平澤驛	陽知縣	長湖院 (支)加洞
16日	稷山縣 (支)牙山	竹山縣	可興 (斥)陰城
17日	天安 (支)牙山(滯)	竹山縣(滯) (支)石城村(陰城西行二里)	可興(滯) (斥)槐山
18日	天安(滯) (支)新昌	竹山(滯) (支)陰城	忠州 (支)内倉場
19日	天安(滯) (支)禮山	鎮川(斥) 木川(支)槐山	忠州(滯) (支)清風
20日	德坪 (支)沔川	鎮川 (支)清安	忠州
21日	公州 (支)德山(勝戰谷行)	清州 (支)沙羅里[沙梨?]	忠州(滯)
22日	公州(滯)(戰) (支)洪州	清州(滯) (支)沙羅里(滯)	江原道ノ東徒討滅ノ命 ヲ受ケ其運動等ハ總テ 仁川司令官ヨリ命ヲ受 ケタリ
23日	公州(滯) (支)洪州(滯)	文義(至明戰) (支)報恩	
24日	公州(滯) (支)洪州(滯)	文義(滯)	
25日	公州(滯) (戰)(支)洪州	文義(滯) (支)懷德	
26日	公州(滯) (支)洪州(滯)	龍浦 (支)增若(戰)	
27日	公州(滯) (支)洪州(滯)	文義 (支)懷德	
28日	公州(滯) (支)洪州(滯)	文義(滯) (支)周安	
29日	公州(滯) (支)洪州(滯)	文義(滯) (支)增若	
30日	公州(滯) (支)洪州(滯)	增若	
12月1日	公州(滯) (支)洪州(滯)	沃川 (支)石城村(戰)[青山県]	
2日	公州(滯) (支)洪州(滯)	沃川(滯) (支)青山	

3日	公州(滯) (支)洪州(滯)	沃川(滯) (支)龍山村[永同西]	
4日	公州(滯)(戰) (支)洪州(滯)	沃川(滯) (支)永同(戰)	
5日	公州(滯)(戰) (支)大興(滯)	沃川(滯) (支)錦山(戰)	
6日	公州(滯) (支)維鳩	錦山	
7日	公州(滯)[赤松広州に入る]	錦山(滯)	
8日	公州(滯)	珍山(支) 錦山(滯)	
9日	公州(滯) (支)青大橋	連山 (支)龍潭	
10日	公州(滯) (支)芙江[世宗市／清原郡]	連山(戰) (支)農山附近(戰)	
11日	論山(戰) (支)破軍里	魯城 農山村附近(滯)	
12日	龍水幕附近 (支)鎮岑[西大田]	恩津 鎮安(戰)	
13日	公州 (支)連山	恩津(滯) (支)栗谷邑附近(戰)	
14日	華軒[敬天西] (支)恩津	恩津(滯) (支)高山(戰)	閔慶 亦全羅地方ノ賊徒ヲ討 伐スベキ事ヲ命セラル
15日	恩津	恩津(滯) (支)高山(滯) (支)林川	台封
16日	恩津(滯) (支)韓山 (支)錦山 (支)高山(滯)		尙州
17日	恩津(滯) (支)龍安 (支)舒川 (支)錦山(滯) (支)益山		功成
18日	參禮(支) 東之同 (支)械亭里 (支)高山 (支)益山		開寧
19日	參禮(滯) (支)茂朱		金泉
20日	全州 (韓日支)東之同(全州ニ於テ本隊ト合ス) (支)茂朱(滯) (韓日支)金溝		知禮
21日	全州 (滯)(日韓支)金溝(滯)(戰) (支)茂朱(滯)		新昌
22日	全州(滯) (日韓支)金溝(滯) (支)安城場市		居昌
23日	全州(滯) (日韓支)泰仁(滯) (支)長溪店		安義
24日	全州(滯) (支)泰仁(本隊ニ合ス) (支)長水		咸陽
25日	全州(滯) (支)2川原 (支)長水(滯) (日韓支)井邑		雲峰

